

# マクシム・ゴーリキーのフォルクロール論と日本におけるその受容

加藤 秀雄

## 序

関敬吾が著した『民話』（一九五五）に対する井之口章次の批評は、「この書名をみてちよつと首をかしげた」という書き出しから始まる<sup>1</sup>。この疑問は、既に民俗学内部で流通していた「昔話」という言葉があるにも関わらず、関が自らの書名に「民話」を採用したことによるものだが、実際は「昔話」を「採用しなかった」ことへの疑問というよりも、「民話」を「採用した」ことに対する批判とみるべきだろう。

井之口は、「民衆の話、人民の歌声を以て、世の中

を明るくしようとする運動に対して、われわれは特に故障を申し立てるものではない。しかしながらわれわれが求めようとするのは、歴史的な学問の資料としての昔話であつて、学問の中立的な立場を堅持するためにも、政治的な運動とは一線を画しておくべきではないか」と述べている<sup>2</sup>。つまり、「民話」という言葉の持つ「政治的な運動」のイメージが、この言葉を用いることの問題点であるとされているのである。

岩本通弥は、『民話』という言葉に、（※筆者注・民俗学者が）これほど異様な拒絶の態度を示すこと自体、今日ではすっかり忘却の彼方で、リアリティも感じられないだろう」と述べているが<sup>3</sup>、当時、「民話」

という言葉がどのような文脈で用いられていたのかという点については、重信幸彦「運動の時代と『聞き書き』という実践——一九五〇年代日本における民話運動とサークル運動」（二〇〇九）に詳しい<sup>4</sup>。この論考を読む限り、劇作家の木下順二や中世史家の松本新八郎らが中心となつて一九五二年に発足させた「民話の会」の活動が、当時の「民話」という言葉のイメージを規定するものであったことは疑いがないと思える。

重信は、当時の「左翼系の知識人が、西洋志向から、『日本回帰』と『民衆志向』を強めていた」こと<sup>5</sup>が、民話の会や谷川雁などを中心に展開していた「サークル運動」の思想的なバックグラウンドになっていたことを指摘しているが、本稿ではこの点を更に掘り下げ、ロシア文学者のマクシム・ゴーリキーによるフォルクロール論、および社会主義リアリズムの日本国内における受容という問題が、民話をめぐる「政治的な運動」の背後にあつた可能性を検討していきたい。

ゴーリキーは、黒沢明の『どん底』（一九五七）で

作品の映画化が試みられるなど<sup>6</sup>、日本国内でも広く認知されるロシア文学者の一人であつた<sup>7</sup>。このゴーリキーの「フォルクロール」に対するまなざしは、当時の左翼系知識人が持っていたそれとの高い親和性が認められ、その影響力について議論することは、民俗学の学問的実践に対する当時の「期待感」を理解する上でも寄与するところがあるだろう。

## 1. 民話をめぐる運動の場とゴーリキーのフォルクロール論

（1）「民族芸術をつくる会」と民話をめぐる運動の場

本節では、ゴーリキーのフォルクロール論に対する日本国内の反応を、一九五四年に発表された「ロシアの民話」（「民族芸術をつくる会」という小文の内容から確認しておきたい<sup>8</sup>。

「民族芸術をつくる会」とは、一九五二年に瀬川拓男が主宰した劇団「人形座」を母体として設立された団体の名称であり、児童文学作家の松谷みよ子や画家

の瀬川康男などが参加していた<sup>9</sup>。その活動目的は文字通り「民族芸術の創造」であったが、特に「民話」はその題材として注目されていたようである。「ロシヤの民話」の冒頭部には、以下のような形で会の課題が記されている。

会を芸術家と科学者の「民族芸術の創造」のための協働の場とするために、「どれがほんとうか」、「どうつくったらよいのか」という評価の基準を会自体がもち、またそれを深めてゆくこと、たとえば、民話の整理、選択の基準の問題、表現上のリアリティとその裏づけになっている歴史的状況の問題、どのように古いフォルクロールがつくりかえられ、また、新しいフォルクロール作品が作り出されているかということ、民話における表現の伝統的形式の問題などを学び、私たちの「理論」をつくり出し、またそれを創作で実践をしてゆくという課題を立てました<sup>10</sup>。

このような課題を達成する上で、会では説話研究者

の藤沢衛彦を講師として勉強会を企画し、「民俗学者や地方誌家のつみあげられた業績をもとにして、地方の方々と協力してさらによいフォルクロールの採集整理の工作をすすめてゆく」としている<sup>11</sup>。しかし、このような「工作」はなぜ必要とされたのだろうか。その理由を考えていくうえで、ゴースキーのフォルクロール論、および社会主義リアリズムの受容という問題が顕在化してくる。

「ロシヤの民話」では、ゴースキーの「諸君のフォルクロールを集め、それに学べ」、「口碑的詩的想像を知らずに、真の民衆の歴史を知ることとは出来ない」、「おとぎ話は作家のファンタジイをつよく発達させ、芸術のためのフィクションの意義を正しく理解させ、さらに重要なことには―彼の荒れたことば、彼の貧しい語をゆたかにさせる」といった言葉を引用しながら<sup>12</sup>、民話収集の必要性を説いている。つまり、民話には民衆の精神や歴史が反映されていることから、これを「民族の芸術」に活かすべきだとされているのである。

このような考えは、当時の左翼系知識人が持ってい

た「民衆志向」とも合致するものであり、ゴリキーのフォルクロールに対する考えが、日本における民話運動に影響を与えていたことは想像に難くない。そこで以下では、ゴリキーがフォルクロールをどのようなものとしてみなしていたかということについて、ソビエト民俗学との関連も視野にいれながら確認していきたい。

## (2) ゴリキーのフォルクロール論とソビエト民俗学

「ロシアの民話」には、「ロシアの民衆のなかには、たくさんのおとぎ話の専門家——話している。：ゴリキーはおばあさんアクリーナ・イヴァーノヴナ・カシリーナのおとぎ話を聞いた」というくだりがある<sup>13</sup>。ゴリキーのこの個人的な経験は、フォルクロールに対する彼の考えが形成される上でも重要な位置を占めるものだったらしく、一九三五年に発表された論文「民話について」でも<sup>14</sup>、自身が幼少期にどのようなフォルクロールに接してきたのかということが述べられている。この論文は、新聞『ピオネールスカ

ヤ・プラウダ』紙に掲載されたものだが、同紙では五百以上の民話を蒐集し、紙面でその一部を発表していた。蒐集は主にソ連の小学生が参加して行われたとされ、発表された民話は全てゴリキーのもとに送られていたという<sup>15</sup>。

ゴリキーが「フォルクロールⅡ民話」の価値をどのように理解していたのかという点については、「ソヴェト文学について」（一九三四）に最も端的に表れている<sup>16</sup>。これは、一九三四年八月に開かれたソビエト連邦作家同盟第一回大会における報告演説をまとめたものであるが<sup>17</sup>、ゴリキーはこの演説中で、ブルジョワジーの文化に対する過剰な評価を批判しながら以下のように述べている。

同志諸君、私はふたたび、もつとも深く鮮やかな、芸術的に完全な主人公のタイプがフォルクロールによって、勤労人民の口碑的創作によって創造されている事実にたいし、諸君の注意を喚起したいと思う。（中略）すべてこれは、その創造において、ラチオとインチュイチオ、思想と感情

が調和的に結合されたところの形象である。かかる結合は、創造者が現実の創造へ、生活更新のための闘争へ直接的に参加するときにいてのみ可能である<sup>18</sup>。

この一文からゴリキーが、フォルクロールを「勤労人民」の「思想と感情が調和的に結合されたところの形象」とみなしており、これが「現実の創造」、「生活更新のための闘争」によって生成されると指摘していることが読み取れる。そしてその収集が、「勤労人民の真実の歴史を知る」ことに繋がるとされるのである<sup>19</sup>。このようなゴリキーの考えがソビエト民俗学の学問的目標にまで接合されるに至っていたことは、ソ連体制下の民俗学の教科書とされる『Русское Народное [Впечатл.] (一九六六) に収録された「文学(リテラトゥーラ)とフォリクロール」(イ・エス・プラウジナ著)における次のような文章からも明らかだろう。

ロシアにおける解放運動のプロレタリア時代の

フォリクロールは、文学と切り離せない。このことは、社会主義レアリズム文学の開祖というべきゴリキーの創造の例でも、よくわかる。闘争に立ちあがる民衆、この闘争を指導する階級の立場で、生きる道を初めて紹介したこの作者は、単に民間創造と関連を持っていたのではなく、いわばそれを卒業していたことがよかったのだ。ゴリキーは、民間詩歌を直接的に保持し、あるいは創造する環境に育ち自己を形成した。才能ある作者たちと身近に接していたことがゴリキーにとってプラスとなった。

そしてまたゴリキーを、ソビエト民俗学の開祖と呼ぶこともできよう。(中略) 民間創造はゴリキーが、闘争にめざめた民衆の内面的な生活を、深くえぐって見せるのに役立った<sup>20</sup>。

ここでゴリキーの創作活動に影響を与えたものとして、「民間創造」という概念が登場するが、ソビエト民俗学におけるフォルクロールは、この言葉と同義であり「庶民(プロストナロージェ)の第一義に属

する人たちの創造から生み出されたもの」、「教養ある社会層によって創造された文学（リテラトゥーラ・書き記されたもの）の概念に對置され、その多くが口承によるもの」であると定義される<sup>21</sup>。そしてこの「フォルクローレ＝民間創造」の延長線上に「民族芸術としての文学」が位置づけられるのである。

ここまでみてきたようなソビエト民俗学、あるいはゴリキーの「民衆／民族の歴史」と「社会主義リアリズムによる芸術作品の創造」に対する志向は、相关性を持つかたちで日本国内でも受容されることになる。事実、ゴリキーのフォルクローレ論は、主に「歴史」と「創造」に携わる日本の知識人たちに大きな影響を与えるものとなっていた。「創造」に関しては既にみた民族芸術をつくる会の活動によって、その一端を垣間見ることができたが、次章では、歴史学者の石母田正による議論を参照し、「歴史」に携わる研究者がどのようにゴリキーのフォルクローレ論を受け入れていったのかを検討しておきたい。

## 2. 「民族の歴史」と社会主義リアリズム

### （1）民俗学的実践への「期待」

石母田正は「歴史学における民族の問題」（一九五二）のなかで<sup>22</sup>、ゴリキーのフォルクローレ論を評価しながら、以下のように述べている。

私どもはこのような認識と情熱をもって、神話や民話や民謡を学ぼうとしているでしょうか。われわれに豊富に整理されてのこっている民俗学の成果について、私ども歴史家は、それだけ学んでいるでしょうか、また学ぼうとしているでしょうか。もちろん私はゴリキーの言葉を根柢として、フォルクローレや民謡の研究が、現在の日本の歴史家の主要な課題であるなどといっているのではありません。それは日本の現在の事情や学問の課題から考えて、われわれが独自に決定すべきものであることはいうまでもありません。ここでのいいたいののは、態度と方法、歴史にたいする新し

い評価の仕方についていっているのであります<sup>23</sup>。

石母田はここで「歴史にたいする新しい評価」を行う上で民俗学の成果を参照する必要性について説いているが、更に別の箇所で「時代々々の文化を花にたとえれば、（※フォルクローレは）土壌にちかいものといつてよいと思います。このようなフォルクローレを生みだしてくるのはいうまでもなく名もない大衆であり、その集団である。この大衆や人民といわれるもの、あるいはこれらの民衆の労働こそが、段階と段階、時代と時代を一つの鎖につないでゆく地盤を形成しております。この大衆こそが民族なのではないでしょうか」とフォルクローレの主体となる「民衆／民族」を位置づけている<sup>24</sup>。

石母田の議論において注意を要するのは、民族の「文化の土壌」としてフォルクローレをみなすという民俗認識である。石母田はフォルクローレを「支配階級の文化や思想の変化や発展に比べても、動かないと見えるほどじょうに転移ののろいもの」としている

が<sup>25</sup>、このような不変性、普遍性を民俗に見出すという発想自体は、伝承の変化を認識論的な前提としてきた戦前の民俗学における対象認識とは明らかに異なる<sup>26</sup>。しかし、石母田の議論と同時期に民俗学・民族学者たちによって盛んに議論されることになる民族性、基層文化といった概念の背後にある民俗認識は、石母田のそれと一致しており<sup>27</sup>、相互に影響を与えあうかたちで学問的な問題意識の形成がなされていった可能性があるといえるのではないだろうか。このように考えた場合、石母田が「民衆／民族」の歴史、およびその性質を明らかにするための材料としてフォルクローレに注目したゴースキーの議論を評価する理由も、自ずと理解されてくるだろう。

石母田は民俗学的な成果を歴史・民族の問題へと接合させる方向性を示唆したが、その実践において人びとの生活をフィールドで対象化し描き出す民俗学の「聞き書き」という方法が、「期待感」を持って迎えられていくことになった。ゴースキーが標榜した社会主義リアリズムやフォルクローレ論は、一九五〇年代に活発化する「国民的歴史学運動」、「民話運動」という

かたちで現実化していくことになるのである。

## (2) 社会主義リアリズムの影響

いわゆる国民的歴史学運動の契機になったとされる<sup>28</sup>、石母田正「村の歴史・工場の歴史」(一九四七、一九五二)では、民衆が掘り起こした村の歴史語りの模範例として長野県開田村に伝わる義民・平次郎を祀る地蔵の伝説が紹介されている<sup>29</sup>。さらに、工場の歴史については、茨城県池貝鉄工所に勤める労働者が綴った記録が取り上げられているが、興味深いことに、この記録の結語にもゴリキーの名が見られる。

人から聞いた話だが、ゴリキーはソ連の労働者に工場の歴史を書くことをすすめたそうだ。ゴリキーの工場の歴史というのは、池貝のこの最後の歴史にちがいない。ここには共通の法則がつまぬいているように思われるが、そのことよりも、遠い北国の偉大な作家の頭にうかんだ構想と、私たちが小さい機械工場の体験から考えた空想がこのように一致することのなかに、労働者階

級というもののものつひろい展望がひらけて来る気がする<sup>30</sup>。

既にみてきたように、ゴリキーは人びとに対してフォルクロールの収集を推奨していたが、同様のまなざしで工場における労働者の「記録」も重視していたのである。「村の歴史・工場の歴史」において注目すべき点は、村の「民話」と労働者の「記録」が併存して取りあげられている点であるが、前者のようなフォルクロールの収集と創作は民話運動として、後者のような記録活動はサークル村などの運動として展開していくことになる。両者に共通する思想は社会主義リアリズムによる民衆の歴史と現実の表象であったということが出来るが、重信が指摘するように、この両者の運動は人的にも思想的にも密接なつながりを持っていた<sup>31</sup>。ゴリキーを中心としてソビエトで展開した創作活動における社会主義リアリズムは、戦後間もない日本でこのように受容されていたのである。



## まとめと今後の課題

本研究ノートでは、「民話」をめぐる政治的運動の背後に、マクシム・ゴリキーのフォルクロール論、およびこれと関連する社会主義リアリズムの受容という問題がある可能性を検討してきた。社会主義リアリズムは、フォルクロールを民族の「真実の歴史」を表象するものとして位置づけなおし、ブルジョワジーの歴史を相対化するものとして評価したが、今回みてきたように、戦後日本における「民話」や「大衆」へのまなざしは、ゴリキーの思想の影響下にあり、その後の社会運動における推進力として受け入れられていったのである。

今回は詳しく触れることができなかったが、社会主義リアリズムにおけるフォルクロール観や民衆像は、戦後民俗学における基層文化論や民族性論、常民像の形成といった問題とも関連している可能性がある。これらの問題については更に資料にあたったうえで、今後取り組むべき課題としたい。<sup>32</sup>

## 註

- 1 井之口章次「書誌紹介 関敬吾著『民話』」「日本民俗学」三巻二号 一九五五 一一〇頁
- 2 前掲注一
- 3 岩本通弥「『生活』から『民俗』へ」日本における民衆運動と民俗学『日本学』第二九輯 二〇〇九 五一頁
- 4 重信幸彦「運動の時代と『聞き書き』という実践——一九五〇年代日本における民話運動とサークル運動」『日本学』第二九輯 前掲注四 六九頁
- 5 『どん底』はゴリキーがA・チェーホフのすすめで書いた戯曲であるが、日本国内におけるその受容は明治四十三年（一九一〇）にまで遡り、小山内薫の新劇運動を介してのものであった。小山内訳による『どん底』は、二代目市川左団次を主演とし、昭和十一年（一九三六）年の段階で十数回にわたる上演がなされている。中村白葉「日本における『どん底』上演年表」ゴリキー『どん底』岩波書店 一九三六 一六九—一七四頁参照。
- 6 日本国内におけるゴリキー作品の翻訳は、明治三十八年（一九〇五）の「猶太人の浮世」（原題は「カインとアルチョム」（二八九八）、「太陽」二、三月号掲載）が二葉亭四迷訳で紹介されたのが最初期の訳出であると考えられる。なお昭和期に入っ

- でも断続的に翻訳作業は進められ、中野重治訳『レーニンのゴ  
リキーへの手紙』（叢文閣、一九二七）などがある。ちなみにこ  
の本の装丁は橋浦泰雄が担当した。湯浅芳子「日本における  
ゴリキー」『新日本文学』九月号 一九六八 一〇三頁、鶴見  
太郎『柳田国男とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』  
人文書院 一九九八 二二―一頁参照。
- 8 民族芸術をつくる会「ロシアの民話」『歴史評論』六〇号 一九  
五四
- 9 松谷みよ子・伊藤英治『松谷みよ子の本（別巻）―松谷みよ子  
研究資料』講談社 一九九七 五二九頁
- 10 前掲注八 四一頁
- 11 前掲注八 四一頁
- 12 前掲注八 四二・四八頁
- 13 前掲注八 四三頁
- 14 M・A・ゴリキー「民話について」『ゴリキー 児童文学  
論』新評論 一九七三（一九三三）
- 15 前掲注一四 二二八頁
- 16 M・A・ゴリキー「ソヴェト文学について」『ゴリキーの文  
学論』ナウカ社 一九五〇（一九三四）
- 17 ソビエト連邦作家同盟は、それまでロシアに存在していた文学  
団体を全て解散し、一九三四年に設立された団体である。社会
- 主義リアリズムによる文学の樹立を掲げ、ゴリキーが初代議  
長に就任した。
- 18 前掲注一六 三一五頁
- 19 前掲注一六 三二五頁
- 20 大木伸一編『ロシアの民俗学』岩崎美術社 一九六七 一七四  
―一七五頁。本書は、前述の『Русское Народное Творчество』  
を大木が翻訳したものである。大木は、一九六八から一九六九  
年にかけて「ソビエト民俗学における二、三の問題」および  
「ソビエト・ロシアの人生儀礼」と題する発表を日本民俗学会談  
話会（第五〇五・五一三回）において行っており、ソビエト民  
俗学の紹介を試みているが、「日本の民俗学関係者が『素直につ  
いていけない…』とする嘆息さえ耳に聞きながら（※筆者注・  
『ロシアの民俗学』を）訳出した。」と述べていることから（二二頁）、ソビエト民俗学の理論自体は当時の学会の主流を  
占める研究者たちに受け入れられなかったことが窺われる。
- 21 前掲注二〇 一頁
- 22 石母田正「歴史学における民族の問題」『歴史と民族の発見』平  
凡社 二〇〇三（一九五二）
- 23 前掲注二二 一九二―一九三頁
- 24 前掲注二二 一九四頁
- 25 前掲注二二 一九四頁

- 26 柳田国男「民間伝承論」〔郷土生活の研究法〕（柳田国男全集二八）筑摩書房 一九九〇）など参照のこと。ただし、「大衆の生活」に民族的な「特殊性」を見出そうとする傾向自体は、戦前の左翼活動家の中にも存在していた。鶴見太郎は、戦前の共産党における「解党派」（日本共産党労働者派）を主導した浅野晃（※後に「民間伝承の会」会員となる）が一九三〇年代中ごろに、「運動のうえではたらくさけるべき労働大衆」を「日本の特殊性」に根ざしてもっぱら心情的に受け止められる日本民衆」に転化させていったことを指摘している。鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院 一九九八 八七―八八頁
- 27 例えば、桜井徳太郎、「日本史研究との関連」『日本民俗学』四巻二号 一九五七、和歌森太郎「歴史学との関係から」『日本民俗学研究大系 二』平凡社 一九五八などの民族性（エトノス）に関する議論を参照のこと。
- 28 前掲注四 七〇頁
- 29 石母田正「村の歴史・工場の歴史」『歴史と民族の発見』平凡社 二〇〇三（一九四七、一九五二）三五五―三五八頁
- 30 前掲注二九 三六六頁
- 31 前掲注四 七九―八〇頁
- 32 なお、ソビエト民俗学の政治性やゴリーキーの思想の影響につ

つては、  
 Onas, Felix J. *Folklore and Politics in the Soviet Union*. Slavic Review 32 (1973): 45-58  
 Howell, Dana Prescott. *The Development of Soviet Folkloristics*. New York: Garland Publishing, Inc., 1992  
 Rachel Goff. *The Role of Traditional Russian Folklore in Soviet Propaganda*. Perspectives Student Journal 12 (2004)  
 などの論文や著作がある。特にレイチェル・ゴフは、ソビエト民俗学に対するゴリーキーの影響について綿密な検討を行っており、ソビエト民俗学やゴリーキーの фольклор 観を理解する上で参考になる。